

豊後一の宮杵原八幡宮と 県護国神社を巡る

吉田 勝 重

(会員 佐伯市女島)

令和元年十月十日、私たち史談会会員十二名は、第三十一回歴ロマン探検隊の訪問地、大分市八幡地区の杵原八幡宮に向け出発した。

杵原八幡宮は豊後一の宮として昔から名が知られており神社本庁の別表神社である。旧社格は国幣小社であった。「いすはら」「ゆすばる」とも呼ばれ、「由原八幡宮」とも表記される。

本殿の形式は「八幡造り」で天長七年（八三〇）、宇佐神宮の分霊地として創建されたという。祭神は仲哀天皇、応神天皇、神功皇后の三神である。八時二十五分に佐伯文化会館の駐車場を出て約一時間あまりで到着した。この八幡宮の場所は大分市上八幡三組に位置づけられており、高崎山の裏手に当たる。

この社に展示されている刀剣や仏像などが国指定重要文化財に指定されている。境内にある天然記念物の大楠やホルトの気は有名である。



杵原八幡宮楼門

私たちは一の鳥居の前で神水で手口を清め、頂上に続く階段を上っていった。鳥居の左右には漢字で「種恵懐

遠休茨千開」「八鄰仰化秦漢来帰」と書かれている。階段を上った所に一对の灯笼と二つの祈念碑、大きな「ホルトの木」が私たちを出迎えてくれた。

左右にある灯笼は享保三年癸亥八月吉日、阿部氏の寄進した灯笼がある。右手には玉垣建設記念碑（昭和三十年三月十五日建）と仮宮並神苑整理碑があり、その後方に「ホルトの木」がある。この「ホルトの木」は、高さ二十五メートル、幹周四・八メートル、樹齢四百年と言われている。大友宗麟の時代、当時の宣教使が持ち込んだものと伝えられている。

さらに階段を上ると天保十年己亥正月吉日奉納された石灯笼がある。この灯笼は左右が別々の時代のもので途中の灯笼部分が紛失している。左側の石灯笼は天保十年の年号のほか寄進者、海部郡馬場村小野平助、石工鷺尾喜右衛門の名が見える。右側の石灯笼には昭和八年十一月奉納の物で、千百年記念 大分魚市株式会社仲買人組合の名が見える。

この石灯笼の上には、朱塗りの鳥居（平成二年五月吉日 紀元二六六〇年）がある。さらに階段が続く。四十一段の階段を上った所に一对の石灯笼と、中国風の

壁面彫刻に飾られた「ひぐらし門（東門）」がある。石灯笼には宝暦三癸酉年十二月吉日、田中氏源孝殷 松尾氏大神惟栄の銘がある。

ひぐらしの門は豪華である。



由原八幡宮ひぐらし門



この日暮門には、このような彫刻が前後左右、天井に彫られており、枚数は四五十枚に上る。この日暮門の中央の柱の下方には、寄進主の名前が掘られた銅板が張られていた。左側には寄進主として蛇口村・嘉右衛門、利兵衛、九右衛門三名の名が、右側には寄進主、久保村小野瀬兵衛の名があった。

日暮門を潜った先、左手に天然記念物の大楠がある。楠の説明文には次のような文面が見られた。



「今を距る壺千百五十年前、御鎮座に由来を持つ神木と言う。大正十一年三月天然記念物指定 樹齢三千年余、

目通し周囲二十一メートル、根周囲三十七メートル、高さ約四十五メートル、樹洞内部直径東西八・五メートル、南北十一メートル八畳敷きの穴あり」と。



この大楠の先から道は二つに分かれ、本殿へと続く本殿の手前には社務所、本殿の場には絵馬殿（工事中）があり、周りの樹木と相まって神仙な雰囲気醸していた。この杵原八幡宮では、毎年七月三十一日に夏越祭が催される。これは夏後半の無病息災を願って西門にもうけら

れた生茅の輪を潜り、神社のご神体の代わりに金幣をかざし、四キロ下の西大分かんたん港まで運び、かんたん漁港で海難事故防止を願う。生石の浜ではこの時「潮かき」がおこなわれるという。九月の仲秋祭では浜の市が開かれるという。

また、杵原八幡宮勧請の起源（延暦寺の僧金亀が千日間の行を宇佐八幡にて行った事）から、昔は神輿を賀来神社まで運ぶ神幸祭もあったようである。

この杵原神社周辺は神域とされ、古くは杵原八幡宮領としてかなりの広さを領していたと言う。

この杵原神社の左手の道を進むと、幕末の府内藩の財政再建のために、日田の豪商広瀬九兵衛が開拓したと言う開拓地がある。道路が狭いという事でこの時は中止したが、後日ある会員から「吉兆原成立記録書」を見せていただく機会があり、再び訪問した。

広瀬九兵衛は府内藩主松平左衛門丞近訓の要請により府内藩の藩政改革を実施した。九兵衛は藩の米・金の出納から銀札場、蒔会所にいたるまで藩財政のすべてをまかされた。藩の政治面は岡本主米が、経済面を広瀬九兵衛が担当した。俟約令を敷く一方、藩内に新たな開拓地

を開き土地を造成、米の増収を図った。

その一環として作られたのが大分市机張原の開墾である。この地は現在の大分市高崎、杵原、机張原、金谷迫、庄の原に及ぶ広大な土地である。まず高崎村の佐藤弥治、右衛門を召し出し、協議の上、佐伯藩主毛利氏に依頼し、農業に従事する者数十名を貰い受け、七蔵司村のミホダという所から開墾を開始した。佐藤弥治右衛門の申し出により開拓地域として、高崎村字新村、女狐の山林、原野、村田畑澤地を藩が買い入れた。

この地に大きな溜め池「放生池」を造り、この水を利用して五十余ヘクタールの土地を開墾した。

広瀬九兵衛は事業の完成を見届けるまで机張原に庵を設け滞在したという。開墾に参加した人々は机張原地区一組二組の者で、開拓以前の三組四組とともに共同作業をしたと伝えられている。

佐伯藩からこの地に移住した人たちの名前は「開拓記録書 大分市八幡机張原 吉兆原成立記録書」に記載されている。拾町組、中六軒、下六軒の都合二十二名である。出身は網代浦、朝海見浦（浅海井浦か）と書かれている。現在、広瀬九兵衛が造った「放生池」は地震によ

る決壊等を防ぐため水を抜き補強工事を行っている。この工事は今年の十二月まで行われるという。

この池の左の道を進むと机張原の交差点に出る。交差点を右に回った高台に広瀬九兵衛と佐藤弥治右衛門の墓がある。

墓の前には、この地の開墾についての説明書がある。

広瀬九兵衛の墓には「南陔広瀬翁之墓」と銘が刻まれ、佐藤弥治右衛門の墓には「吉兆原開拓発起人」の名が刻まれている。



工事中の放生池

広瀬九兵衛の開拓地の杵原、金谷迫、庄の原、机張原の人々は「杵原さまのお下り」と称して賀来神社まで、神輿を担ぎ移動したという。



→ 佐藤弥治右衛門の墓
↑ 広瀬九兵衛の墓

また、逆に賀来神社から「柞原さまのお上り」と称して柞原八幡宮まで神輿を担ぎ上げたと言う。これが「賀来の市」「浜の市」の始まりである。これらの地区は昔から「柞原神社の荘園」であったと伝えられている。豊後国国田帳にも「由原宮御神領二四六町」と書かれている。このあと私たちは、西南戦争時の警察官がまつられている大分県護国神社に向かった。

大分県護国神社は、大分県大分市にある神社です。大分初代県令森下景端が慰霊顕彰のため、明治八年十月十八日に松栄山に招魂社として造営されました。

この神社の祭神は、明治以降の闘いで戦病死した人々の霊を祀ったものである。

最初に祀られたのは、蛤御門の闘い、佐賀の乱、台湾出兵で亡くなられた二十二柱でした。その後の熊本神風連の乱、西南の役で二九七柱が追加され、その後の日清日露戦争、シベリア出兵、中国での戦闘、第一次第二次世界大戦など、現在までに亡くなられた人々四万四千柱が祀られている。

今回私たちは、西南の役にて殉職した警察官の墓地や西南の役の軍人墓地を訪問した。

西南の役の際殉職した警察官は、第一鳥居から上った境内の中程右側に祀られていた。奥の方に警部、警部補、警部心得十二名、中央に警視および二等、三等、四等巡查、軍夫など併せて一〇三名の墓があった。

さらにこの墓地の右手奥に重岡警察署勤務の十等警部藤丸宗蔵の墓、北海部郡臼杵の羽田野嘉平治の墓が建てられていた。



この警察官の上の台地に、西南の役で闘い戦病死した人々。竹田、三重、重岡、臼杵の闘いで戦死した軍人、二十八都道府県の兵の墓地があった。

警察官墓地の中で特に目を引いた人がいた。その人は福島県士族で旧会津藩藩士佐川官兵衛である。会津藩士として藩主会津容保に従って上洛、鳥羽伏見の戦い以後は会津に戻り、家老職をつとめる。会津戦争以後は以後は斗南藩の一員として再興に努めた。明治以後は川路利良の懇請により警視庁に出仕し、一等大警部に任命され

た。西南戦争では戦役初期から豊後口第一号警視隊一番小隊長として従軍し、阿蘇郡黒川村袴田での闘いで被弾し没している。四十七歳であった。

この東京警視隊一〇三名の墓地の左奥に祀られている。私たちはこの他神社内に祀られている人々の慰霊碑、記念碑などを順次見て回った。

松栄山の頂上には、この護国神社の本殿があり、左右に能楽堂、言霊記念館、儀式殿、特攻の碑などがあつた。本殿左手の言霊記念館横には、今大戦の時大分市高城にあつた高城発動機工場の門扉(弾痕の痕が残されている)が展示されていた。





西南の役軍人墓地



戦時中の高城発動機工場